

2018年度 海外研修委員会の取り組みと実施報告

南山高校女子部

～ アジアコース設立の経緯・生徒のリフレクションからみる現在の2コース ～

海外研修委員 福田啓介

研究 年報
教育活動
29号
2018
月刊

1. はじめに
2. これまでの実施場所の移り変わり
3. ベトナム・カンボジアコース設立の経緯
4. 生徒のリフレクションからみる各コースの総括
 - 1) イギリス チェルトナムレディーズカレッジ サマースクールコース 2018
(海外研修・英語科合同 イギリスチェルトナムコース報告会より)
 - 2) イタリア 2015年度～2017年度における生徒の様子から

1. はじめに

近年、南山女子部では、海外研修における実施地やコースの内容の変更が著しい。今年度の委員会は、委員会発足理由や各コース設立の原点に立ち返り、現コースを検証するとともに、新たなコースを模索してきた。海外を訪れることで、何が生徒に還元されるのか。話し合いの中で、アジアコースの重要性を再認識し、ベトナムとカンボジアという新たな場所を選定した。本稿では、アジアコース設立に至るまでの経緯と、生徒の各コースの振り返りを引用し、現在行われている2コースの実施報告をさせていただくこととする。

3. ベトナム・カンボジアコース設立の経緯

本校では、高校受験がない分、自分の進路について具体的に考えることが疎かになりやすい側面がある。高校1年の秋頃から選択科目を考えるのと同時に、親と擦り合わせをしながら、進路選択を悩み始めるが、自分自身がどのような人になりたいか、どのような職業に就きたいのか。私自身も担任をしていて、自信を持って自分の将来について語ることができる生徒は、それまでに自分自身でどれだけ進路のことを考えて、具体的に行動したかが大きく関わっていると常々感じてきた。つまり、生徒たちは、自らの経験からしか、将来のことを具体的に考えることができないということである。本校には、キャリアトライアルなど職業体験をする生徒も年々増加しているが、海外研修の側面からもキャリアサポートをしていくことが出来ないかと考えていた。

私自身、マレーシア研修に何度か付き添いをさせていただいた経験がある。参加生徒たちが、口を揃えて言うのは、今まで持っていた価値観、普段は当たり前であることが、当たり前でない文化を体験したとき、自分自身での心の成長を実感できたという。毎年、生徒たちと進路について話をしていると、国際関係の仕事や、国際貢献、ボランティアに興味を持つ生徒が一定数いることを感じていた。

本年度の委員会では、「国際的視野の育成」と謳う中、現在のイギリス・イタリアのヨーロッパのみでは、相当な偏りがあるという意見が出された。国際社会の多様性や複雑さを学ばせるためにも、このコースのみでは不十分であると考えた。中学の早い時期からアジアに目を向けさせ、国際社会で活躍する現場に赴き、現場の人から学ぶことで世界に羽ばたく人材を育成したいという願いで新コースを立ち上げることにした。そして、委員会でカンボジア・ベトナムを選定したのである。選定時に留意した3点について述べておきたい。

①アジアの著しい経済発展を体感できる場所

観光立国としても有名なマレーシアは、海外研修委員会で上げた時期からかなりの発展をとげ、もはや発展途上とは思えないほどに成長しつつあった。そのような中で、依頼した旅行社の3社中2社がインドシナ半島地域を提案してきたのである。このことからわかるように、新たに活力に満ち溢れる国々が徐々に他にも現れており、カンボジア・ベトナムに注目した。

②授業に関連し、生徒に事前事後学習が行いやすい場所

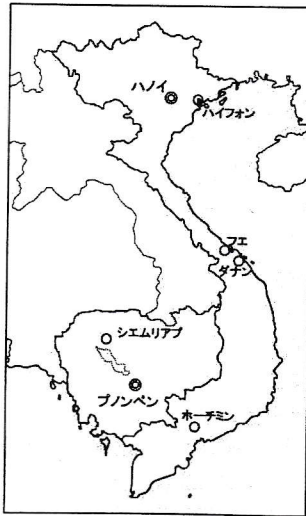
事前学習で実施する学習テーマは以下の通りである。

- (1) カンボジア アンコール遺跡群から探る宗教の違い・ポルポト政権時の悲劇
- (2) ベトナム ベトナム戦争からの復興・世界企業のベトナム進出・メコン川での暮らしと自然
- (3) 両国共通 海外で活躍する日本人・日本のODA支援・インドシナ半島の歴史・社会主義国ならではの特徴

③キャリア教育の側面を強く打ち出せる場所

- (1) カンボジアのシェムリアップでは、アンコールワット遺跡修復現場見学と修復体験がある。気候の影響で保存が難しい世界遺産をどのように守っているのか。現地で見学

と体験をすることで、日本のODAとの関わりを学ぶ
 (2) ベトナムのホーチミンでは、JICA 事務所での研修があり、青年海外協力隊の現地での活動などについて学ぶことができる。また、実際に JICA 協力現場に赴き、見学や現地の方から仕事の内容・やりがいなどを聞く機会を設ける。



主な旅程 期間：6泊7日

- 1日目 中部 → ハノイ → カンボジア (シェムリアブ)
- 2日目 アンコール遺跡群の見学
(バイヨン寺院、像のテラス、ライ王のテラス、南大門の研修)
- 3日目 アンコール遺跡修復 キリング・フィールド 地雷博物館
- 4日目 シェムリアブ → ベトナム (ホーチミン)
JICA 協力現場視察
- 5日目 マングローブ 奇跡の森 (枯葉剤から復活した森) クルーズ
- 6日目 ホーチミン市ベトナム人学生との交流
- 7日目 帰国

参加者の感想

私は、実際にカンボジア、ベトナムを訪れる前には、両国とも貧しく、あまり幸せな生活を送ることができない場所だと思っていました。しかし、その考えは間違っていたことが分かりました。確かに技術の発達などはまだまだ未熟で日本などから援助されていますがそこに暮らす人々は決して不幸せではなく、むしろ全ての人が生き生きとして明るく、こちらまで優しい気持ちになれる方々ばかりでした。日本との1番の違いは、コミュニケーションの豊かさだと感じました。道端で会う知らない人にも気軽に挨拶し、道を聞く、という光景をなんども目にしました。日本では知らない人に話しかけることはあまりないので、カンボジア、ベトナムの人々のフレンドリーな姿に驚きましたが、すごくいい心地がしました。日本に暮らす私たちはなんて狭い世界を見て過ごしているのだろうと思いました。日本は技術がとても進んでいますが、コミュニケーションもどんどん失われつつあります。技術が進めば人々は幸せに暮らせるのか、そもそも幸せとは誰に対しての言葉で、どういうことを指すのか、という疑問が私の中に生まれたことが大きな変化です。(S1A 奥村 明日香さん)

「リアルなカンボジア・ベトナム」を見聞きたことは、私の中のアジア像を大きく変えた。確かに日本より衛生面や金銭面で恵まれていないことは明白だったが、貧しく日々の生活に困窮している様子の方は少なく、多くの人が日本人より幸せで余裕のあるように見えた。経済成長は当然幸福に直結するだろうと考えていたが、私たちが後進国と呼ぶ国の人々に本当に必要なのは衛生面と教育の支援のみで、先進国のような経済的豊かさを築くことがすべてではないのではないかと考えた。私が見たように、トクトクツにかけたハンモックで昼寝をしたり、屋台で食べ物を売りながら家族とゆっくり過ごしたりすることも、ある種の幸せには違いないからだ。(S2A 増田彩夏さん)

私はこの研修を通して、新しい外の世界を知るとともに、自分の内面についても多く知ることが出来たことが一番の変化だと思います。その中でも自分には面倒くささのために行動しないことや力不足など自分の弱さから無意識に目をそらすために自分自身に理屈を言い聞かせていた一面があったのではないかと気が付いたことが大きいです。研修では多くのものを得ましたが、そこで得たものは自らが磨いていかなければ価値が半減してしまうことでしょう。現地での経験や思い出、学びの記憶を維持し続けるという意味においても帰ってきてから研修をどう活かすのかを勝負と思って自分に出来ること、すべきことを考えていきたいです。

(S1D 山田はるかさん)

ブンバケンの丘から夕日を見ると、外国人に話しかけられた。私は海外が大好きで話しかけられて嬉しかったのだが、自分の英語の能力に自信がなくておどおどしてしまい、うまくはなすこともできず、後々、せっかくの機会だったのに…とひどく後悔した。この原因は、英語を話し慣れていないこと、また、外国人と話したことがあまりないことだと私は考えた。英語の知識が圧倒的に足りないのは勿論だが、その中でももっとできることがあったと思う。今までの英語への姿勢を見直さなければならぬと感じた。

(S1A 島本 紗弥さん)

総合的に見て改めて思ったことは今の生活が当たり前ではないということです。カンボジアで夕日を見た後の帰りに小学生くらいの子たちがマグネットを売っているところを見たときにしみじみと感じました。自分たちは日々「学校やだな」とか「勉強したくない」とか思っているけど、世界には勉強したくてもできない子たちがいて自分たちは恵まれているのにそれを当たり前だと思ってしまっていた自分がいて、本当に自分はおろかだんだんと思いました。今回初のアジアコースで正直不安なこともたくさんありましたが、この異国の地で過ごした七日間は新しい気づきが多くとてもいい経験になりました。(S1B 池野音葉さん)